

明治二十年代の初期の年表ならゴシックで印刷するべきものに、帝国憲法の発布と教育勅語の渙発（かんぱつ）がある。

この二つは、わが国の政治と教育に基本的な行路を示したもので、当時千古不磨の大典と称せられるものであったが、奇しくもその制定に当って二人の熊本県人が大きな役割を果たした。井上毅と元田永孚（ながさね）がそれである。

元田は熊本市花畑の生れ（その生誕地碑は日本専売公社熊本地方局の構内、市バス停に隣接している）明治元年宮中に召されて侍講（じこう）となり、以来二十年天皇の師傳（しふ）として信任最も厚く副島種臣（そえじまたねおみ）をしていわしむれば「明治第一の功臣」とさえ讃えられている。

井上はややおくられて同じく熊本市竹部（たけべ）に生れ（その生誕地碑は市立高校前庭にある）後、法制局長官、枢密顧問官、文部大臣等を歴任した。帝国憲法の制定は、明治二十三年の帝國議會創設の前提として行なわれたもので、起草の中心は時の首相伊藤博文であったが、実質的な立案者は法制局長官の井上である。井上はドイツ（プロシヤ）

の憲法をテキストとして明治十九年から執筆をはじめて二十一年四月にその稿を終えた。

この草案は枢密院の会議によって検討を加えられたが、枢密顧問官の中には元田永孚も加わっていた。井上が立案者として議案の説明に当たったことはいうまでもなく、元田がよき助言者となったことも想像に難くない。帝国憲法と熊本のつながりがいかに深いかを知るべきであろう。

熊本出の二大功臣

くまもとの明治百年

(その5)

山口 白陽

である。こうして同年十一月二十九日、記念すべき第一回国会は開かれた。

その直前、すなわち明治二十三年十月三十日に、教育勅語が渙発された。明治五年学制頒布（はんぷ）以来、わが国の教育は大まかにいって保守、革新の二つに色分けされた。熊本に限って言えば前号に述べたように、それは学校党、実業党の対立として現れた。天皇はさきに明治十二年、元田に命じ

れを改め、更に元田永孚が主となって両者議を重ねつつ成案を得たのであった。これまた熊本県人の血液が脈々として流れているといつて過言ではあるまい。

教育大旨、幼学綱要、教育勅語、この一連の教育方針は、一言にしていえば仁義、忠孝の儒教精神を底流としたもので、これを裏返せば西洋流の倫理道徳がそれだけ退した感じは免れないであろう。

済々黌の教職員がはじめてこの教育勅語に接した時、同養創立以来の教育方針と全く一致したものであるとして狂喜したというのも無理からぬ次第であった。

いまでもなく、敗戦を境として国家の様相は一変し、わが国は民主国家として新憲法を制定、かつての明治憲法は政治史の一ページを飾るに過ぎぬこととなった。

一方教育勅語もまた、同時に新教育法にとって代られ、「不磨の大典」は今や地下に埋没したかの感がある。

現時点においてこれは当然のことであるが、今から八十年の昔にさかのぼって当時の世相をつぶさに考える時、われわれの二大先輩が果たした大きな功績については、毫も割り引きすべきものではない。（郷土雑誌「呼ぶ」主宰）

う。

明治二十二年二月十一日、紀元の佳節を期してこの欽定（きんてい）憲法は発布され、日本は立憲君主国として、近代国家の面目を一新したのであった。

二十三年七月第一回の総選挙が行なわれ、熊本県は佐々友房、前田家山子、木下助之、古莊嘉門、紫藤寛治、岡次郎太郎、山田武甫、松山守善の八人を議政壇上に送った。保守系五、進歩系三の割合

て「教育大旨」を書かしめ、教育の基本方針を示されたし、同十五年には、同じく元田の執筆で「幼学綱要」という教科書が宮内省から全国の学校に配布されたが、更にこの教育勅語によって最後の成案が与えられたのであった。

教育勅語は明治二十三年五月、時の文相芳川顕正が、先ず中村正直（敬字、洋学者、教育家）に起草を托したが、その立案は洋風に偏するとあって井上毅がこ

★くまもとカメラスケッチ

港（その2） 三角港

三角港は天草島に囲まれた天然の良港。九州本土と天草を結ぶ天草五橋の起点であり、別府、阿蘇、天草、雲仙を結ぶ国際観光ルートの要衝でもある。貿易港として沖縄定期航路があり、また外国からの貨物船の入港が絶えない。

磯釣り、海水浴、ハイキングなど四季を通じてバラエティに富むレクリエーション基地でもある。



上・シーズンともなれば観光客で港もはなやぐ。



上・港の施設の管理維持をする県三角港管理事務所。



上・空から見た三角港の全景。



上・貨物船の出入りも活発になった。



上・三角港には植物防疫の施設があり、外国からきたラワン材なども港の貯木場で一斉に消毒される。